

heisei16

六花

Rikukwa haikukai

10

晦日そば kuragari ni negi hiitekishi misoka soba
初景色 umi wo ume yama wo kezurit e hatsugesiki
如月 kisaragi ya kaseki ni narishi sakana kana
蝶 une tsukuru saki he saki he to haru no cho
凧 ohdako no orikite kusa no iro to naru
夕桜 hahani yu wo tsukahasini yuku yuuzakura
盆の月 bon no tsuki haha no ko to shite furo wo taku
暑 raomen to ihujiga atsushi tenmabashi
メロン ami nadoni tojikomori iru melon kana
暑さ kono atsusa jazz ni arrange shite mimuka
金魚 urenokoru mizu wo ninahi te kingyo uri
柿 kaki tawawa tsuma no egao wo ryoyaku ni

designed by Asuka

訪
戴



山田六甲

前の世の風吹いてをり蟬の殻
思ひまでもつて行かれし蟬の殻
子午線を行つたり来たり赤とんぼ
秋風や明石のたこをり食ひ
萩の花こぼして楽しさうに雨
彼の世では何色に咲く曼珠沙華
ぼんと咲きぼんぼんと咲き曼珠沙華
篠山の山家の猿に曼珠沙華

篠山のデカルトカント曼珠沙華
半年は寝て過ごしけり曼珠沙華
疑へばだんだん赤く彼岸花
曼じゆさげ前頭葉が留守である
運動会どこにゐるのかわからない
運動会蟻踏みさうで飛び退きぬ
運動会われも有色人種かな

百号を自祝して

百号も十重とおなれば千生りに

宝寿司山田照明さん回復

大将の戻つて来たり祭鯨

温め酒

松 山 律 子

家中の灯を消してみる満月
夜の鹿居るか時々不整脈
タケカンバ踏ん張れ雪は重たいぞ
消しゴムで過去は消せない障子貼る
過去があつて今の私がある 噫、

卒 寿

二 瓶 洋 子

卒寿まで欠くる年なく粽結ふ
南天の花を啄むところ見ず
付け帯に直して貰ふ単帯
蝉声の未だ聞かざる小暑かな
酷暑来て行儀作法もなかりける

夏 蝶

鳴 海 清 美

ほ う た る や 鬼 籍 に 入 り し 顔 顔 顔
黒 南 風 や 旅 行 冊 子 の 届 き た る
青 葉 風 家 鴨 の 一 団 蹤 い て く る
夏 蝶 や 迷 ひ 解 け る 水 の 音
籐 椅 子 の 窪 み へ 眠 気 誘 は る る

虫

中 村 房 江

一 時 代 前 の 歌 聞 く 夜 学 か な
間 の 抜 け た 恋 と 気 の つ く い ぼ む し り
独 酌 に つ ま み は い ら ず 後 の 月
虫 聞 い て 束 の 間 ひ と に 遅 れ け り
菊 の 鉢 か か り つ け 医 も 老 い 給 ふ

囚われの水母に砂のお城なぞ

鳥川 昌実

バス停の同じほう向く扇子かな

炎天下潤してゆくシースルー

ライターの炎くらます西日かな

夕焼に満たされておるグラスかな

海で遊んでいた人間によって捕獲された水母、がよりによつて、砂で囲った水たまりに入れられているのか、という嘆き。囚われの悲劇。

すぐに崩れるお城、水分のない世界に放り出される水母、ダブル悲劇を見ているのかも。ほかの句も佳い。

橙木集



百日紅

貝森 光大

おだやかな午後ある暮らし百日紅
帰省子のはや東京を恋しがる
冷奴しばし無言の父と子と
火の夜の一期一会の佞武多かな
朝顔や水に始まる豆腐店

パライソ

小田 元

西瓜玉天真爛漫なるころび
パライソを地獄へ落ちて昼寝覚
くわうくわうと閻魔大王紅ひまわり
パソコンの幾何乱れ雷雨来る
青葉木菟ブリキの金魚浮き上る

小さな旅

角田 信子

火蛾狂う二泊三日のパスポート
国境の南一億のアッパツパ
籐寝椅子四ツ星ホテルの広東語
百万弗の夜景妖艶な蜥蜴
金色のベッドカバーや遠花火

会員作品

六花集



鳥川 昌実

バス停の同じほう向く扇子かな
炎天下潤してゆくシーズルー
ライターの炎くらます西日かな
夕焼に満たされておるグラスかな
囚われの水母に砂のお城なぞ

林 裕美子

夏柳どなたか空に帰るらし
思ひ出で持つ一ヶ月合歡の花
青虫のはらわた真夏のアスファルト
まだ慣れぬ一人のごはん月涼し
夏の風邪夫の他みなやさしかり

中谷喜美子

都合にて中止せらるる螢狩
虫の目の化石となりし半夏生
野菜売る無人の店や西日中
うしろから風送らるる渋団扇
脱ぎ捨てし蟬の殻干す下つ枝

新井

裕

霜寄恵美子

右越路左信濃路破れ傘

田植機は世間ばなしもせずすすむ

焼鳥の串の焦げつく半夏生

月うつる本番を待つ代田かな

巴里祭や男にもある富士額

卓上のほたる袋はすまし顔

百叩きしたき奴あり海酸漿

容貌は人間好み雨蛙

この面は俺の生き様梅雨鯨

雨蛙深夜合唱子守唄

出口 誠

射場 智也

頓服は三錠までと彼岸花

コンビニの夜明け氷室となりにけり

秋桜ポットの白き宿場町

夕涼み沓脱石に腰掛けて

菊日和妻の話のとめどなく

夕凧の人待つてゐる柳かな

変はりなく金木犀の武家屋敷

公園にペットボトルと夏の月

百分の四十くらひか轡虫

どこまでも誠実な奴雲の峰

菜根譚



山田六甲

滑走路空に繋がり雲の峰

木内美保子

木内さんの作品は最近とみに佳くなっている。掲句当たり前といえは当たり前ではあるけれど、このように詠まれたら、なんだか滑走路を進むと空へのびているバージンロードのようで歩いて空へ行けそうな気がしてくるのだ。言っていることは実だが歩いて行けそうなところは虚で、虚と実の皮膜にあるところが佳い。

類似点を母は拒否する夕簾

信崎 和葉

類似点とは要するに似ているところだ。良いところではなく欠点の類似点を言っているのだ。「ああ、おまえは私の嫌なところばかり受け継いだね、やだよだ」などと会話をしながらも親子の団欒のひとときなんだろう。

ところで、作者の母上は、私が電話でもしもしと申っただけで、六甲だと察してくださる鋭い人で、私にとってはとても素敵な母上なのである。